

感性 + 空想 =
ライフス

松岡りづる

僕は日々に飽いていた

何も与えられず、何も起きず、何もしない日々が

ただただ苦痛だけを僕に与え続けていた

そして僕は苦痛の日々から目を背けたくて

非日常の人生たちを創りはじめた

僕は一人立ち尽くす
土砂降りの雨の中で
どうしようもない孤独と
言い様のない悲しみ
その二つと君を抱えて
僕は一人立ち尽くす
誰もいない街の中で
来るはずのない救助隊と
あるはずのない奇跡
その二つを君と待って
僕は一人立ち尽くす
冷たくなった君を抱いて

他人を信じること

それは良いこと

カッコいいこと

だけどそれは危険なこと

自分の好機をその人に任せるということ

絶対に他人を攻められないということ

間違えれば命を落としてしまうかもしれないこと

誰がどこをどうしても完全にはできないこと

でも、この世界の誰もが必ずしていること

完全にはならなくても

完全に限り無く近づけることはできること

遠くに見える地平線

その向こうを僕は目指す

自分にはない何かを探しに

自分が欲しがる何かを得るために

だけど、時々立ち止まって考え込む

一体どれほどの距離を

どれほどの時間をかけて歩いたんだろう

地図も時計もコンパスさえも持たない僕は

ただただまっすぐに歩くだけ

どこまでも続くなにもない砂漠の中を

地平線の向こうにある何かを

自分の力でつかみ取りたいから

僕をこの街は知らない
この街を僕は知らない
なのに僕は歩いてる
海のきれいな街の中を
やがて歩いているうちに
瑠璃色の交差点にたどり着く
全部の信号が青になった
群青色のバスがそばを通り過ぎる
一番後ろの女の子は
どこか寂しげな藍色の瞳をしていた
道路脇のベンチに寝転んで蒼空を見上げる
家に帰りたいな

僕は一人

たった一人

ここはどこ？

みんなはどこ？

君はどこ？

僕はどこ？

真っ暗でなにも見えない

でも、なんだか道がわかる

真っ暗でなにも見えないのに

なんだかすごく自身がわいてくる

そばに誰かがいてくれている気がする

進まなきゃ

いつまでも立ち止まっている訳にはいかない

僕はきっと一人じゃないはずだから

僕はなぜ生まれてきたんだ？

そう自分に問うけど答えは返ってこない

自分探しの旅の途中

僕はふと自分に聞きたくなった

「自分はどこに住んでいるの？」

「この先の泉さ。自分の他にも自分がいっぱいいるよ。」

僕は見たくなった

泉の水は七百色で

透明な水は一滴もない

指から垂れた一滴の七百色は

泉の中の自分を映す

僕はその時やっとわかった

何のために生まれてきたのか

僕は生きるために生まれてきたんだ

一度も忘れたことなんてないよ
授業の間も、バイトの間も
今日は何の日か
君は覚えてる？
今日はね、デート記念日なんだよ

いつもと同じように動いているけど
いつもと同じ動きはひとつもない
それは人間にも同じこと
一日という交差点を
個人という車が意思と運命というハンドルで
明日を選ぶようなもの
毎日同じように過ごしているように感じるけど
決して毎日と同じではない
人生は毎日の違いによって成り立っている

時々、僕は考える

いつかは世界も終わってしまうのだろうか

僕が君に

君が僕になるころには

神はとっくに死んでいるのだろうか

終わりが見えないこの世界に

僕はなにかの不安を覚える

何何何！！

僕は何かを考える

何かって何？って言われると

何とも言えないんだけど

何故か何かを考えてしまう

何時なのか、何処なのかもわからない

とても未来の自分のこと

何が何で何なのかわからなくなってしまった

せっかくの休みだし

どこか出かけようか

戦争はなくなる
誰が何人でどうしたとしても
今は戦争をなくすより
もっと重要なことがあるのに
ピエロは笑いながら
災いの種をまき続ける
だから戦争はなくなる
いつの時代も
争いの種は尽きない

今日でこの校舎ともお別れだねと
語り合いながら校門をくぐる
しゃべりあい、笑いあってふざけてた時間も
もう全てが戻ってこない
次に朝陽が昇るころには
もうみんなと会うことすらできなくなる
今までの自分を捨てるのは
生まれ変わるってことなんだと
この日、先生に最後の授業で教わった
生まれ変わり、羽をはばたかせ飛び立っていく先は
社会という名の大きな空
今日、君は大人になったんだ

たちこめる霧のなかで
僕の分身が叫んでる
これでいいのか？
この道でいいのか？
本当に後悔はしないのか？
僕は微笑みながら歩き始めた
世の中、人それぞれに道があるんだ
だから、僕にも道はあると
疑わずに歩き続けた
もし分岐点で道に迷っているなら
棒の倒れた方へ歩けばいい
たとえ選んだ道が地獄行きだとしても
自分で天国に変えりゃいい

どこまでも続く線路

その先にあるのは喜びか悲しみか

ただひたすら真っ直ぐにしか歩かない君に

神様はタバコを取り出した

唯我独尊、ただ生きるだけの君に

誰も注目しやしないよ

どうせならもっと速く走れたらいいのにな

嗚呼、もっと鳥のように速く飛べたらいいのにな

人生、働くのが使命

そんなんじゃ誰も相手してくれないよ

もっと派手に個性出して生きなきゃ

せっかくの人生面白くないよ

ただ地味に働くだけの君に

神様はビールを飲み始めた

一所懸命、頑張るばっかの君に

誰も遊んでくれないよ

どうせならもっと派手にはしゃげたらいいのにな

嗚呼、もっと貴族のように派手に遊べたらいいのにな

真っ青な大空の下で
今日も僕は生まれた街を旅するんだ
青が基調のこの街の片隅で
ひっそりと息を潜めて見ているのは幸せの青い鳥
朝焼けは水色に染まり
夕焼けは群青に染まる
僕はそんな街が
すごくすごく大好きだ
明日もまた目を開ければ
蒼色の世界が広がっている
そのなかを探検しながら歩くのが
僕の楽しみさ

朝陽に染まる僕らの街を
風のように駆け抜けて行く
校門の前で待つ君が
目を凝らしたら微かに見えた
心なしか少し近くにいるような気がした
世の中は日進月歩
気がつかない内に置いてかれる
ほらあの娘だってもしかしたら
僕のことを好きかも知れないじゃん

桜が散り、夢が費えた夜
屋根に登って月を愛でた
ふいに鳴った着メロは
さっきあいつがくれた思い出
電話に出たら聞こえたあの歌
下をのぞくとあいつがいた
「よくがんばりました。」
ケータイから聞こえた言葉は
僕の口癖だった

またひとつ世界が壊れる
いくら神でも世界の崩壊は止められない
僕はただただ見ているだけ
愛おしい君がいる世界が
今まさに壊れようとしている
僕はまた、ただただ見ているだけ
泣きたくなっても涙は出ない
神に涙はないから
一番生きるのがつらい種族は
もしかしたら神かもしれない

ぼくの中に花が咲いた
きれいなやさしい花だ
最初は気づかないくらい小さかったけど
次第にその花は大きくきれいになって
ぼくをほれさせた
それからは、その花に夢中だ
これからもぼくは花と生きていく
この花が枯れないかぎり
ぼくにはほかの花は芽を出さない
ねえ、今度はどこに行こうか

冷たくなったこの器
見たところなにもない
なのにいきなり砕けて消えていく
さっきまで燃えたぎっていた炎は
今はもう火種もない
この世のすべてがこうして消えていく
君も僕もそうになっていく
決して抗うことはできない

君は僕に咲いてくれた

僕は君をつみとった

これからは毎日君と会える

来年もまた君は咲くだろう

そのときも僕に咲いてくれたら

僕はとても幸せだ

空を覆っていた雲が砕け散った
青く広大でやさしい君が顔を出す
僕の目にはもう君以外は映らない
ただ君だけを見つめて
ただ君とだけ話してる
君と話すことが
僕にとって最高の幸せ
これ以上の幸せなんて
僕の中には存在しない

一つの卵が涙を流した
茶色の空、油の海、灼熱の大地
先に生まれた者たちによって
地球は死の星へと姿を変えた
「こんな星に生まれたくない」
卵はみるみる内に石化し
割れることのない殻に閉じ込もった
いつかまた生物が歩ける地球になるまで
何十億年、何百億年と眠り続け
人類の歴史が動き出す瞬間を
ただいつまでも待ち続ける

暗い暗い部屋の中で
僕は独り泣いていた
悲しくて、悔しくて
やりきれなくて
そんな時、君は
僕を抱きしめて
「泣いていいよ」って
その優しさはまるで
女神さまみたいだ

電車の窓から見える立ち並ぶビル

「あ～あ、今日も来てしまった。」と悩ませる
この都会の片隅で働き疲れて
手に入れたものは明日への航海？今日への後悔？
また明日もロボットのように働けるように
意思に反しながらもただ安定を求める毎日
変わろう、変わろうって思っているけど
なかなか変われずにいるのさ
明日こそは新しい自分に会えるといいな

細波の音にゆられて
僕の足音はかき消された
もうこの自分が嫌になって
捨てるしか無いような気がした
反転の中へ飛び込んだら
全てが泡になった
世界の底から見上げた空は
まぶしい光に満ちあふれて
僕を笑うように瞬いていた

明日、晴れたら

空が朱くなってきた頃
僕は明日への準備を始めた
明日の自分が楽しめるように
「もしも明日、晴れたら
あの人に会いに行こう」
そんな思いを胸に準備は進む
てるてる坊主は満面の笑顔だ

終電間近の2番ホームは

僕らしかいなくて

「音楽でも聞こう？」って提案にうなずいた

君の旅立ちを祝っているのに

なんでだろう？

涙が止まらないや

ヒラリヒラリと舞う雪が

君を祝福しているのに

僕の涙は止まらないまま

電車に乗り込む君の泣き顔に

涙で濡れた笑顔を返した

空いっぱい星が瞬く夜
二人で見た流れ星に
君はどんな願い事をしたんだろう？
僕たちが結ばれた日も
こんな夜空だった
あの時、僕は胸に誓ったんだ
君を守り続けると
これからの未来に流れる星は
いったいどんな星なんだろう？

自分たちの未来ぐらい
自分たちで描いていきたい
夢も現実も
僕らが創るものだから
忘れないで
君は独りじゃないよ
僕らも生きてる
一緒に描いていこう

「後書き」という名のエピローグ

読んでくださって本当にありがとうございます。

さて、この詩集を読んでみて皆さんはどう感じられたのでしょうか？

ひょっとすれば、とんでもないド中二病だと感じた方もいらっしゃるのではないのでしょうか。

そんなあなた・・・正解です。

この詩集は学生時代に作ったものなので、当時はかなり精神的に不安定でしたから
日々の妄想を書き連ねたも同然でした。

序章（という名の前書き）もその当時を書き表しています。

でも、空想は努力をすれば現実になるんですよ。

叶っても叶わなくても。

その努力をしている最中が”夢”の中なんですから。

どんどん描いていきましょうよ。

あなたの夢、あなたの人生。

ではまた、空想の世界でお会いしましょう。

感性＋空想＝ライフス

<http://p.booklog.jp/book/50160>

著者：松岡りづる

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rizzle/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/50160>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/50160>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.